

第3章 病院構内の先史時代遺跡

千葉 豊

1 はじめに

病院構内一帯は第2章で述べているように、現在の鴨川東縁部にあたり、先史時代には高野川系旧流路、白川系旧流路が流入する低地部を形成していた。従来、この地域では先史時代の遺物はみとめられておらず、先史時代においては遺跡形成の範囲外であると考えられてきた。

そのような状況の中で、A F 19区 (141地点)、A J 19区 (155地点) という構内東辺の調査がすすむにつれて、旧流路にあたる下層の砂礫層中より縄文土器が出土することが判明した。これは磨滅の著しいものもあって、明らかに二次堆積の遺物であり、吉田山西麓から岡崎にかけての微高地上に存在した縄文遺跡からの流れ込みであると解釈された。

ところが、構内東辺の中央に位置するA H 19区 (191地点) の調査では、下層の砂礫層より縄文時代の遺物がみつかったばかりでなく、白川系旧流路の肩部に遺棄されたと考えられる状況で縄文後期の土器をとらえることができた。これは、病院構内で発見される縄文・弥生時代の遺物がたんに東方からの流れ込みによるものばかりでなく、高野川系、白川系の旧流路がながれ、低地部を形成していた病院構内一帯とくに東半部にも、自然堤防上や微高地上に縄文人や弥生人の活動が及んでいたことを推定させる資料となった。先史遺跡として、その性格を改めて見直す必要が生じたといえるであろう。

本章では、以上のような把握にもとづき、最初に、病院構内で出土した縄文・弥生時代の遺物の出土状況とその内容について紹介し、時期的変遷をあとづける。次に、出土遺物のうちでも比較的まとまった資料が出土している縄文後期前半の土器について検討を加える。最後に、隣接して存在する諸遺跡と時期的変遷等について比較し、比叡山西南麓の先史遺跡群のなかでの病院構内の先史遺跡の位置づけを試みたいと思う。

2 遺物の出土状況と編年的位置

病院構内の調査で、先史時代の遺物が見つかっているのはA F 19区、A H 19区、A J 19区の調査である〔浜崎・宮本87, 京大遺跡調査会88, 五十川・浜崎89〕。また、A F 20区の立合調査でも縄文土器を採集している。これらの地点は、いずれも病院構内の東辺に位置

し、吉田山西麓から岡崎にかけて広がる白川扇状地南辺の先端と現在の鴨川の河床礫地帯とのほぼ境界の部分にあたっている。

A J 19区の発掘調査では白川系旧流路である白色粗砂中より磨滅の著しい縄文前期の土器がみつまっている。A F 19区の調査では高野川系旧流路である黄白色砂中より縄文後期の土器がみつまっている。A H 19区の調査では白川系旧流路である白色砂礫中より縄文前期～後期の土器がみつかったほか、歴史時代の堆積層中にも先史時代の遺物が含まれていた。白川系旧流路は北東から南西へ流れており、東側の肩部にあたる位置からは遺存状態の良好な縄文後期の土器が3個体見つかった(図版3)。これは原位置を保っていると判断でき、一括廃棄された状況を示すものと理解できる。白色砂礫より出土した縄文後期の土器もほとんど磨滅していない遺存状況の良好なものが多い。

以上、出土状況について簡単にみたように、大半の遺物は旧流路にあたる砂礫層中より出土しているものであり、本来の位置を保っているとは考えられないものである。しかし、A H 19区の白川系旧流路の肩部から出土した縄文後期の土器は原位置を保ったもので、縄文人の活動がこの地一帯に及んでいたことを明示する資料となった。砂礫層出土の遺物も磨滅の少ないものが一定量あることから、これら調査区の東方、近接した地点に縄文集落が営まれたことを強く示唆するものであるといえよう。遺跡の形成や性格の問題については、最後にふれることとし、最初に出土遺物の内容について時代順にみていく。

縄文早期の土器(図版5, 図13) I 1の1点のみ、歴史時代の堆積層より出土した。山形押型文を横位にめぐらす。細片で磨滅しており、原体長・単位数は不明である。押型文土器は比叡山西南麓ではもっとも古く位置づけられる縄文土器であり、修学院遺跡〔梅川71〕、一乗寺向畑町遺跡〔佐原61〕、北白川上終町遺跡〔梅原35〕でみとめられている。早期前半から、比叡山西南麓一帯で縄文人が活動していたことを示す資料である。

縄文前期の土器(図版5, 図13) I 2・I 3はともに器壁の厚さが2～3mmと薄く、I 2は縄文地に半截竹管文による沈線を2条、I 3はC字形Ⅱ型爪形文〔網谷82〕を横位にめぐらしている。I 2は京都府舞鶴市志高遺跡〔三好ほか89〕などに類例があり、北白川下層Ⅱ式に相当しよう。I 3は北白川下層Ⅱb式に比定される。I 4は縄文地に凸帯を2条貼り付け、凸帯上を半截竹管状施文具で押し引いている。肥厚させた口縁端部にも同一の原体で押し引きを加えているようである。前期末の大歳山式に比定できる。

縄文中期の土器(図版5, 図13) I 5はR L縄文地に凸帯を貼り付け、凸帯上を半截竹管状施文具で押し引いている。口縁端部にも両側から同一の原体で押し引きを加えてい

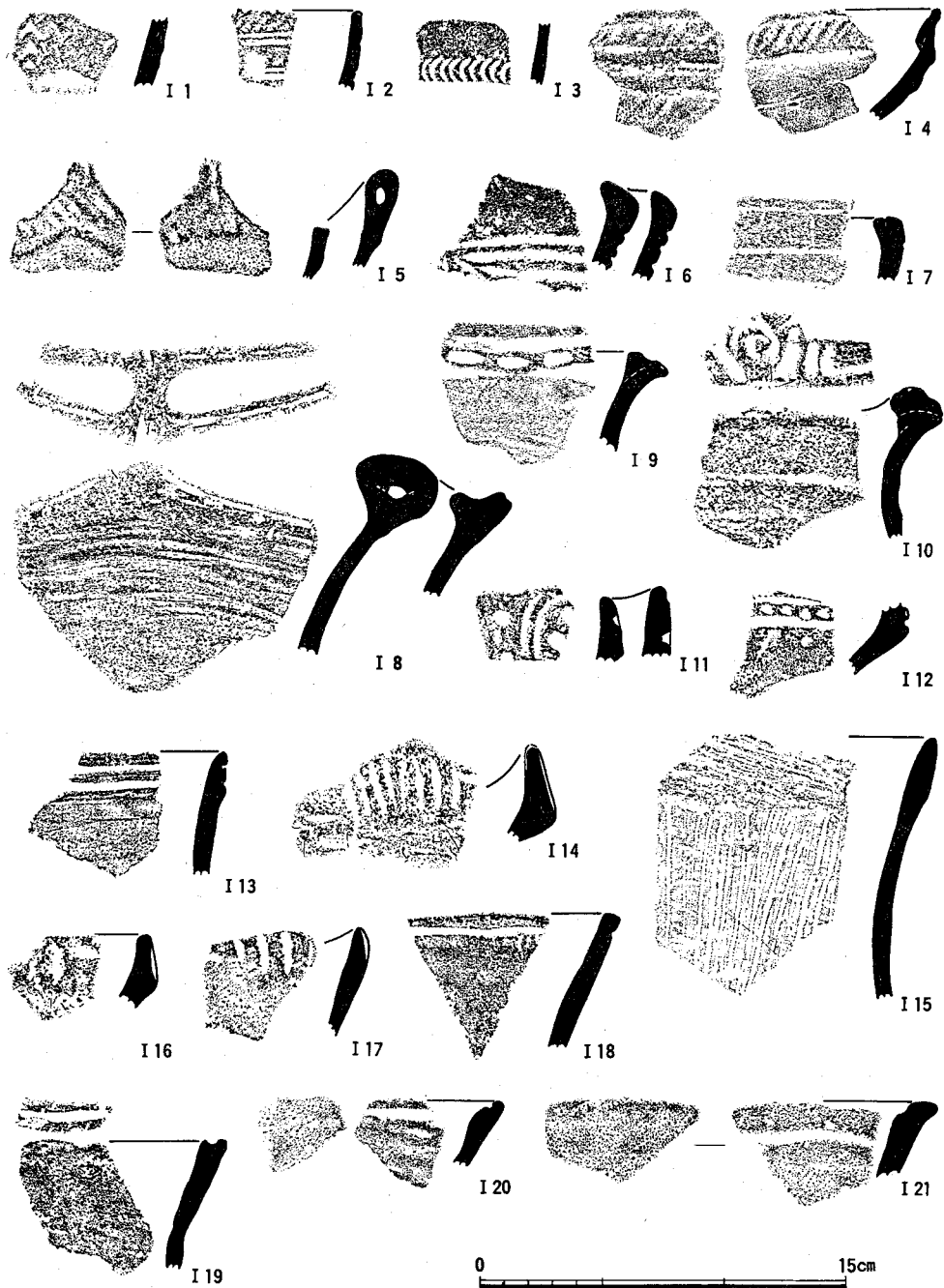


図13 縄文早期の土器(I 1 AH19区), 縄文前期の土器(I 2・I 3 AH19区 I 4 AJ19区), 縄文中期の土器(I 5 AH19区), 縄文後期の土器(I 7・I 9・I 15 AF19区 I 6・I 8～I 14・I 16～I 21 AH19区) 縮尺1/3

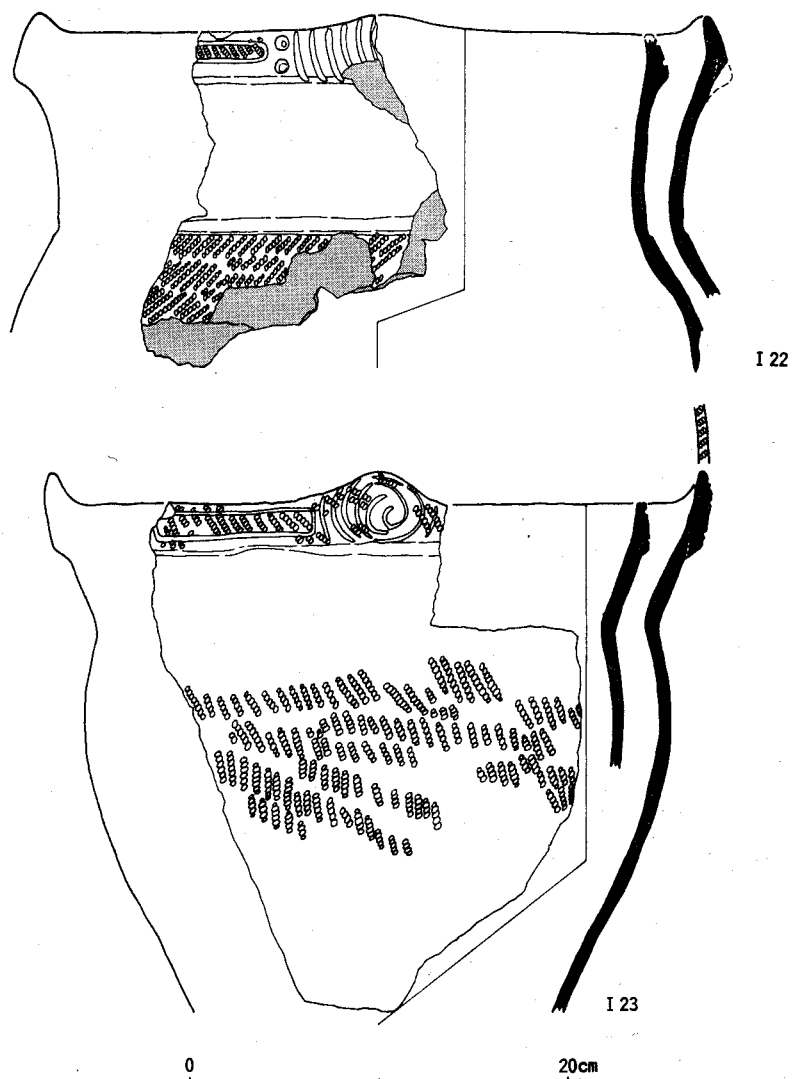


図14 縄文後期の土器(1) (I 22・I 23 AH19区) 縮尺1/4 (梨地部分は剥落を示す)

る。波状口縁で頂部を橋状突起につくる。中期初頭の鷹島式に比定できる。

縄文後期の土器 (図版4～6, 図13～18) I 6・I 7は口縁部が内側へ肥厚する土器。I 6は口縁部直下に3条の沈線が横走り、I 7は口唇上と口縁部直下に沈線がめぐる。福田K 2式に比定される。I 8～I 10は口縁端部が内外に肥厚する深鉢。いずれも口縁端部に沈線を1条めぐらしており、さらにI 8は口縁部外側端部に浅い沈線を加え、I 9は外側端部との間に刺突列を加えている。I 8・I 10は波状口縁を呈し、I 8は頂部を橋状に

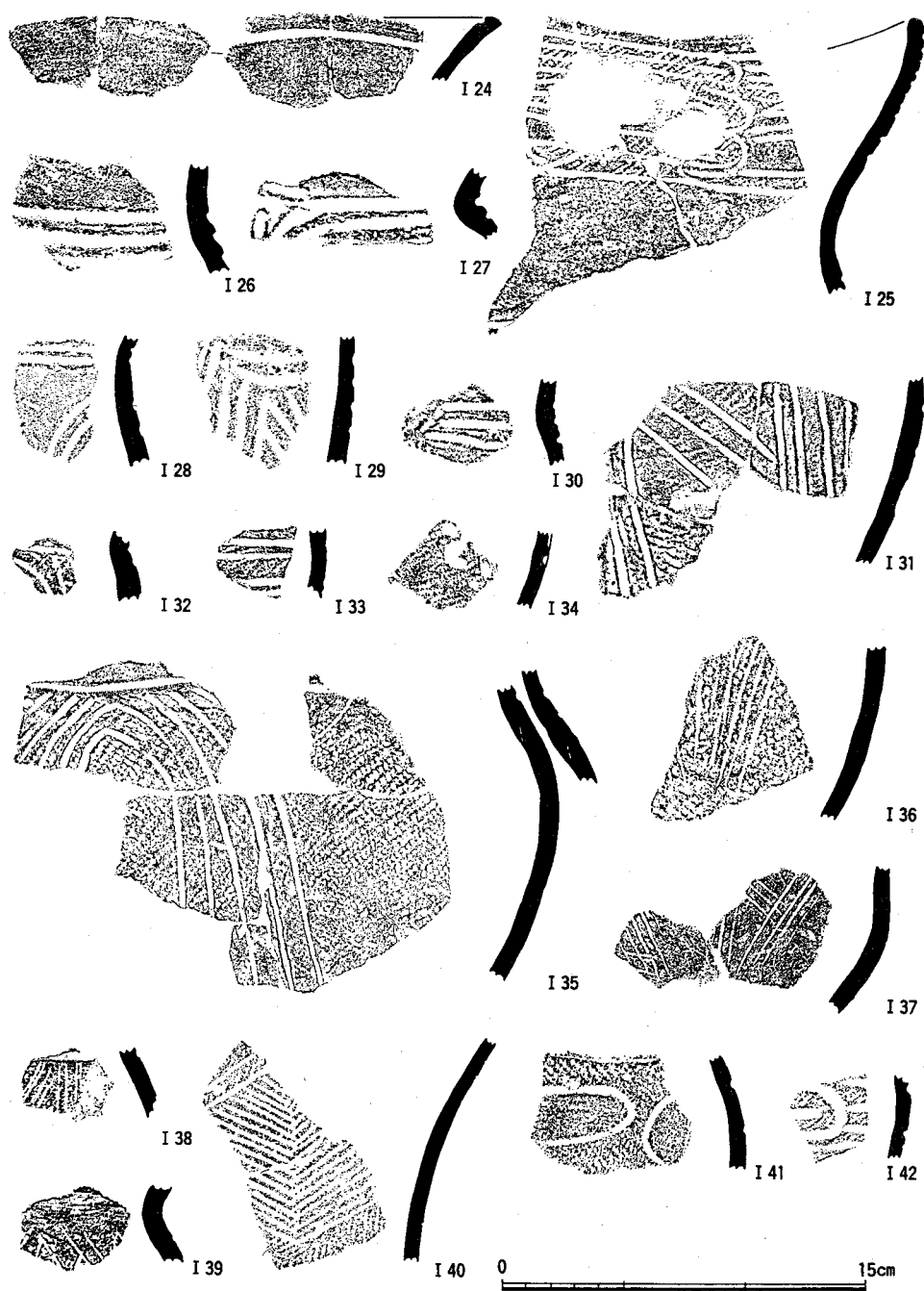


図15 縄文後期の土器(2) (I 28・I 29・I 40 AF19区 其他はAH19区) 縮尺1/3

つくりだし、I10は突起状にし、渦巻文と弧線文を配する。頸部は外反がつよく無文となる。I8～I10は成立期縁帯文土器であり、「広瀬土壙40段階」に相当する。

I11～I17・I22・I23は口縁部前面を屈曲や肥厚によって区別し、そこに文様を施した深鉢。主文様部には弧線文（I11・I22）や渦巻文（I23）、弧線文の退化形態である短直線（I14・I16・I17）を施し、従文様として長方形区画文（I22・I23）や1本沈線（I16・I17）、櫛状施文具で斜沈線（I15）を施す。頸部は垂下条線を加えるもの（I15）のほか、無文帯とする例も多い。I22・I23は胴部までわかる例で、I22はLR縄文、I23はRL縄文を横位にめぐらしている。I22は頸胴部の境を段状につくり、I23はなめらかに移行している。I22は口縁部の縄文にRL（0段の3本撚り）の撚紐を用いており、口縁部と胴部で異なる縄文原体を用いている珍しい例である。なお、I22とI63・I64は旧河川肩部より一括して出土した。I18は口縁部直下、I19は口縁端部に1条の沈線を横走させる。I20・I21・I24は口縁部内面に1条の沈線を横走させる例で、I20・I21は内面がわずかに肥厚する。I25は幅広の口縁部が内湾する波状口縁深鉢。上下を2条の沈線で区画した後、8条の沈線を横走させ、「ノ」字状の沈線を上下に3段重ねて区切り文とし、LR縄文を充填している。胴部に横走する沈線の端がわずかにみえる。I11～I25は北白川上層式に比定され、I11～I13・I22・I23は1期、I14～I21・I24は2期、I25は3期に相当しよう〔泉81〕。

I26～I42は有文深鉢胴部。I26・I27は頸胴部の境を界線がめぐる。I28～I30は3条1単位の沈線を曲線的に配する。I31～I35は縄文地に沈線を施すもので、I31・I34・I35は縄文→沈線、I32・I33は沈線→縄文の順序に施文している。文様意匠は、I31は垂下文を斜行文でつなぎ、I35は多条沈線で逆「U」字状の文様を描いている。I36～I38は櫛状施文具による条線で文様を描く類。I36は縄文を地文に施している。I39は沈線で斜格子文を描く。I40は菱形状の区画帯にLR縄文を施し、区画帯内を綾杉沈線文で充填する。I41は2条の沈線帯にRL縄文を充填する。I42は数条の沈線束を横位にめぐらし、部分的に「ノ」字状に区切りを加え、LR縄文を充填している。

以上の胴部資料のうち、I26・I27は「広瀬土壙40段階」に相当し、他は北白川上層式に比定される。I28～I36は1期、I37～I39は1期～2期、I40・I41は2期、I42は3期に相当しよう。I40は関東系深鉢で、近畿地方でも安定的に器種を構成している。

I43～I51・I61は口縁部や胴部に縄文を施している深鉢。I44は頸部に条線で蛇行文を加えている。I51は巻貝による擬似縄文である。I52・I53は外面全体に条線文を施し

遺物の出土状況と編年の位置

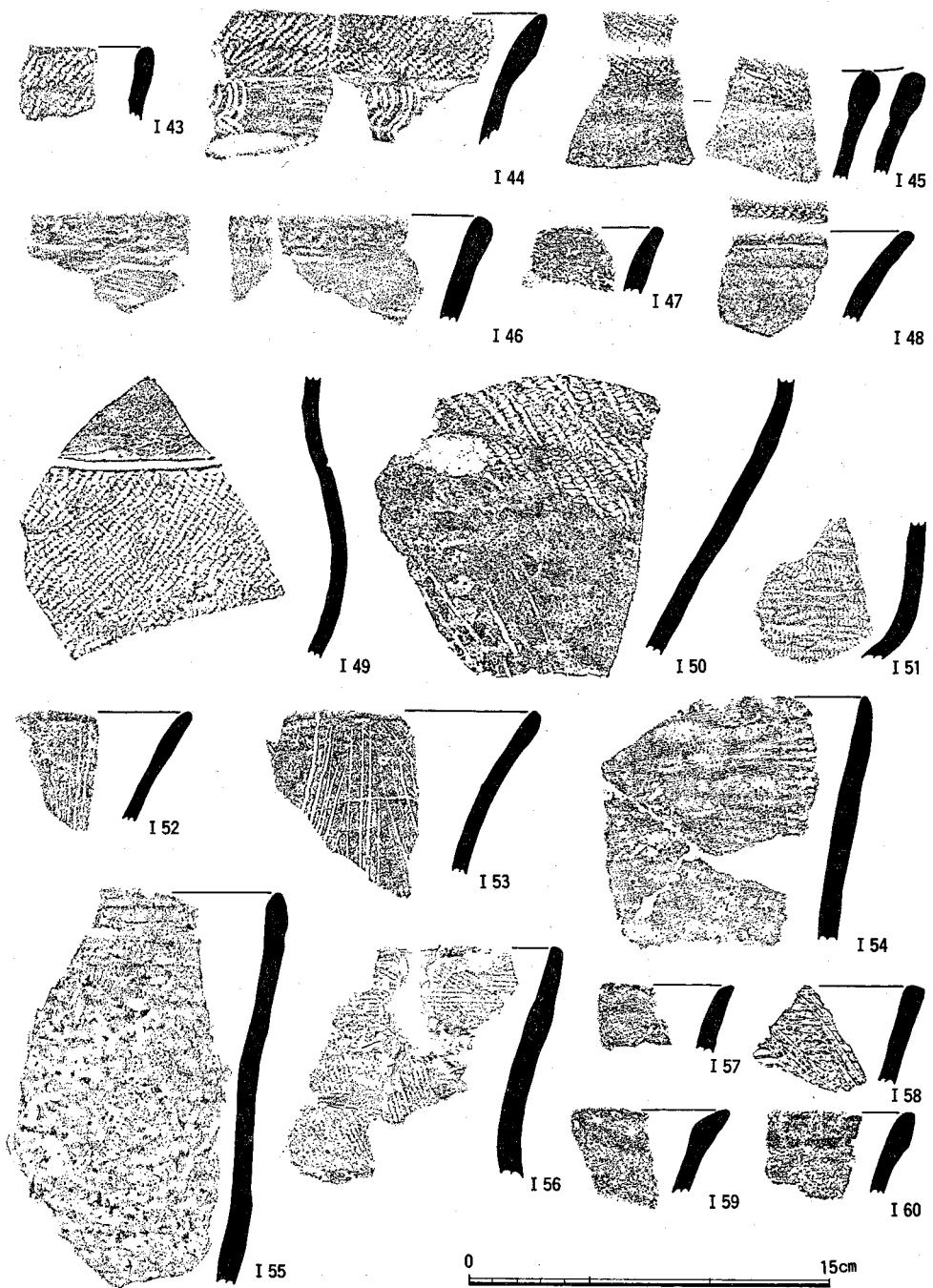


図16 縄文後期の土器(3) (I 43~I 60 AH19区) 縮尺1/3

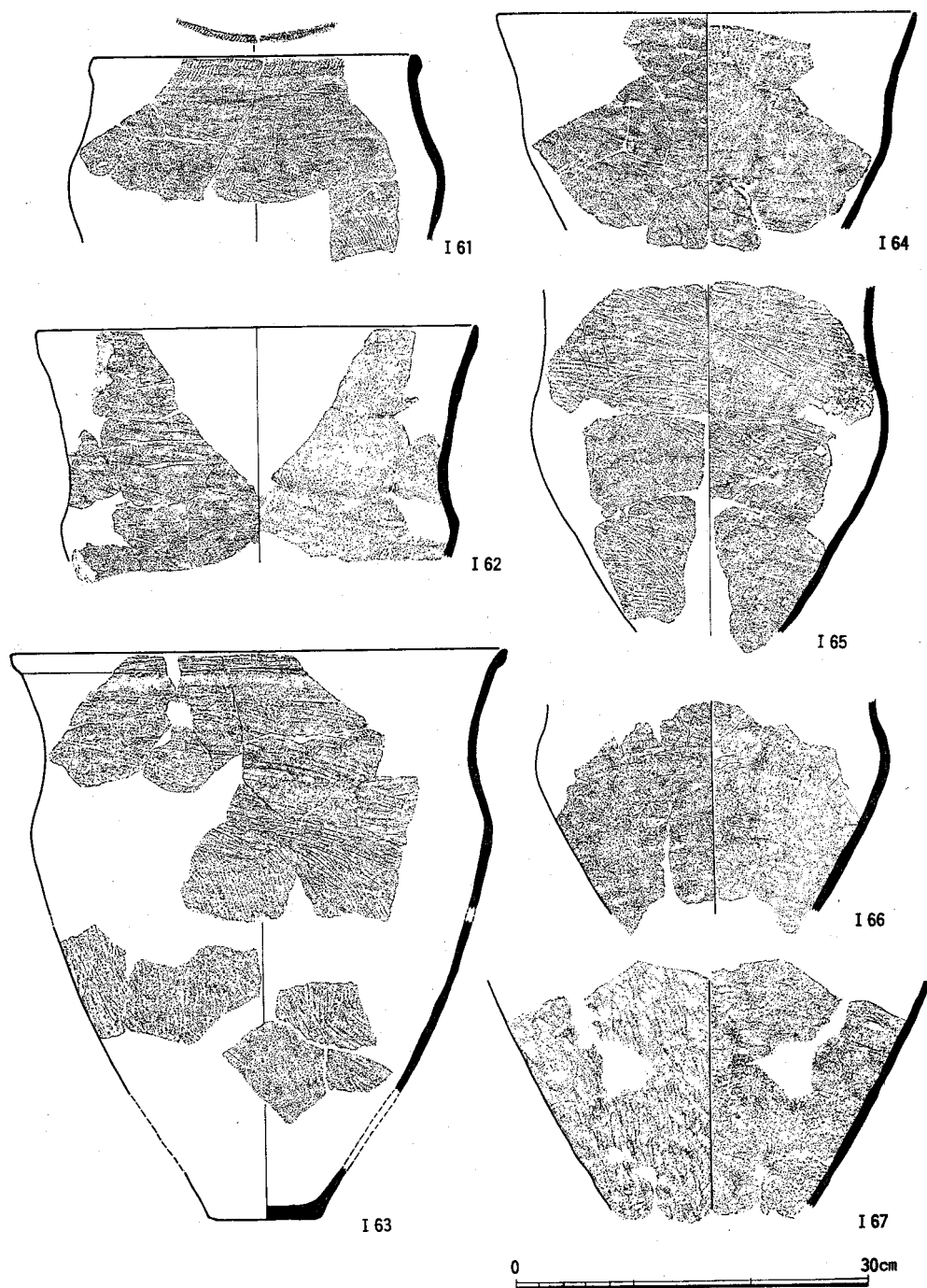


図17 縄文後期の土器(4) (I 61~ I 67 AH19区) 縮尺1/6

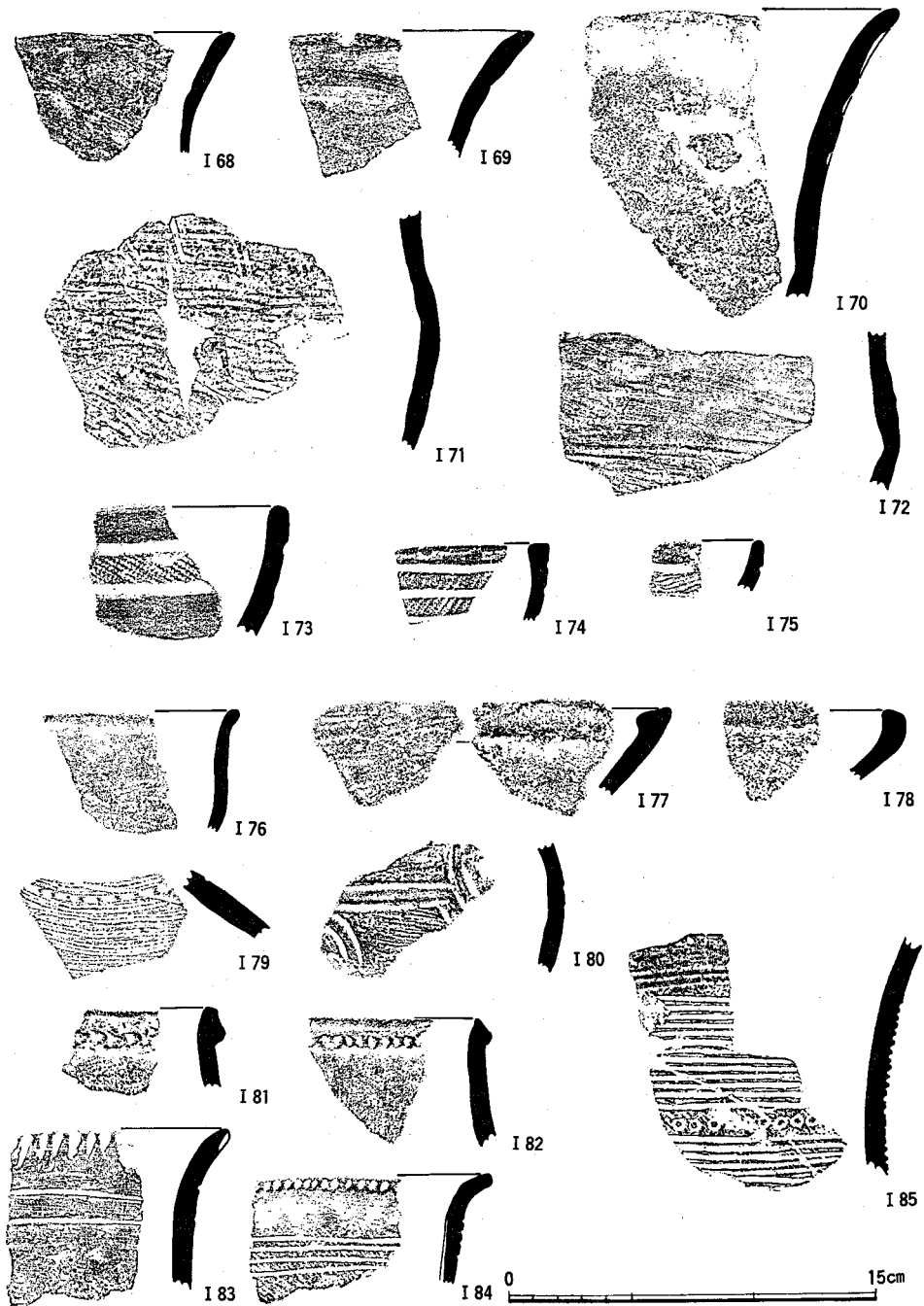


図18 縄文後期の土器 (I 68~I 80), 縄文晩期の土器 (I 81・I 82), 弥生前期の土器 (I 83~I 85) (A H19区出土) 縮尺1/3

た深鉢で、明確な文様帯をもたない。縄文地深鉢、条線地深鉢ともに北白川上層式を構成する器種のひとつである。I54～I60・I62～I72は無文深鉢。口縁端部を丸く仕上げるもののほか、外面を肥厚させるもの（I60・I63）、内面を肥厚させるもの（I59）がある。器面の調整は巻貝による条痕が多いが、I56は「細密条痕」〔横山79〕で仕上がっている。これらは、北白川上層式1期・2期を中心とした時期のものであろう。

I73～I78は鉢・浅鉢の類。I73～I75は口縁下に縄文帯が横走する浅鉢。I74は3条の沈線で縄文帯をつくる。I76は無文鉢。I77・I78は無文浅鉢。I77は口縁部内面が肥厚する。これらのうち、I77はやや古い様相をもつが、他は北白川上層式2期を中心とした時期のものであろう。

I79は結節沈線による区画の中に条線文を横位に密接に加えている。I80は2条沈線帯を曲線的に配し、磨いている。両例は形態・調整などから判断して注口土器の可能性があり、北白川上層式に含まれる。

縄文晩期の土器（図版6、図18） I81・I82は、口縁部に凸帯をめぐらした後葉の土器。口縁部直下に刻目凸帯をめぐらしており、I81は口縁端部を面とりし、I82はうすく仕上がっている。I81は滋賀里Ⅳ式～船橋式、I82は長原式に相当しよう。

弥生前期の土器（図版6・図18） I83・I84は口縁端部に刻みをめぐらし、体部に数条の沈線を加えた甕。I85は壺の頸部で、多条沈線を横位にめぐらし、竹管による刺突列を加えている。I84・I85は、第Ⅰ様式新段階に比定される。I83は端部の刻みが大幅であること、2条沈線の間隔が広いことなど、他に類例をみない特徴をもっている。

3 縄文後期前半土器の様相

前節で記したように、病院構内からは比較的まとまった縄文後期前半の土器が出土している。そこで、個々の土器の編年的系譜的位置づけについてさらに詳しく検討してみよう。

I6・I7は、瀬戸内地域に分布の中心がある福田K2式に位置づけられる。筆者は口縁部文様帯の位置に基づき、口縁部文様帯が口縁下の位置をしめる「古段階」（I6）と一部が口縁端部に上がる「新段階」（I7）に細分した〔千葉89〕。また、玉田芳英はかつて「中津Ⅲ式」としたものを「福田KⅡ式」の「古段階」とし、「福田KⅡ式」を前後2時期に細分している〔玉田89〕。筆者の細分は玉田の「新段階」の内容をほぼ2分する形となる。玉田の「古段階」は、文様構成に中津Ⅱ式の伝統を強くとどめる一方、口縁部の内折、口縁端部の面取り、あるいは不安定ではあるが文様描線の単位に3条、4条といった

多条のものが出現していることなど、新出の要素をみとめることができ、過渡的な様相として理解できよう。玉田や泉拓良〔泉・松井89〕が指摘するように、学史上の配慮より筆者もこの土器群を福田K2式としてとらえ直したい。このように考えることができるとすれば、福田K2式は過渡的時期も含めてほぼ3時期に区分してとらえることが可能となり、I6は第2段階、I7は第3段階に位置づけられよう。

さて、福田K2式は、分布範囲と東日本の土器型式との併行関係についてなお共通した認識を得ていない土器型式である。分布範囲については近畿地域を含めるかどうかで見解の相違をみてきたが、本資料の存在も示すように、分布範囲に含まれることは確実となっている。近年、滋賀県能登川町今安楽寺遺跡で良好な資料〔植田90〕が発見されている。

東日本の土器型式との併行関係については、堀之内I式併行説と称名寺II式併行説がある。筆者は、福田K2式に後続する「広瀬土壙40段階」が堀之内I式古段階・中段階に併行している点から称名寺II式に併行すると予測したが、称名寺I式C類で口縁端部が内側へ突出するようになり、II式で口唇上に文様を加えられるという変化〔今村77〕が福田K2式の細分に関わる変化とほぼ相似点がある点から、福田K2式第3段階が称名寺II式にほぼ併行し、第1段階は称名寺I式C類にさかのぼる可能性が高いと考えている。

I8～I10・I26・I27は「広瀬土壙40段階」に位置づけられる〔千葉89〕。頸部の無文化（ただし、頸部文様を残す例もある）にともない、口縁部—頸部—胴部という西日本縄文後期の有文深鉢の主流をなす文様帯規格が成立した土器で、福田K2式の系譜をひく口縁端部の文様帯、比較的短く、外へ開く頸部といった特徴をもつ。胴部文様は大別して福田K2式の系譜をひくものと東日本系の系譜をもつ2種類があるが、沈線施文後の再調整をおこなわず、沈線の縁に押し出された粘土が残存している粗雑なものが多い点でも前後の時期と区別できる。福田K2式と北白川上層式の間期的な様相を示す土器であり、縁帯文土器成立期として理解している。

I11～I13・I22・I23は北白川上層式I期の縁帯文深鉢。I22・I23は全体の形状がとらえられる良好な資料であり、詳細にみてみよう。なお比較資料として北白川追分町遺跡出土土器があげられる（図19）。I22・I23ともに口縁部外側に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、口縁部文様帯を作る。北白川上層式I期を特徴づける外面施文型の口縁部の作出には、本例のように段状肥厚するものと内湾や屈曲によって区別されるもの（I86～I88）がある。こうした口縁部作出法の成立はどのように説明できるであろうか。まず、前段階の近畿南部の「広瀬土壙40段階」の口縁部作出は口縁端部が内外に肥厚するものが主体を

占めており、口縁部を際立たせるという点では共通性を有しているものの上方へ拡張する1期の口縁部形態との差異は大きく、直接的な系譜を認めることは困難であろう。また、文様等で大きな影響を与えている関東系土器の口縁部形態は上方へ拡張しているという点では共通しているものの、通常1条の沈線が口縁部を横走する幅狭の形態を呈し、幅広の形態を示す1期の口縁部形態との直接的な関係は考えにくい。

「広瀬土壙40段階」の口縁部形態の地域色を眺めてみると、上方へ拡張するものが比較的多い山陰～近畿北部のあり方が問題となろう。「広瀬土壙40段階」の山陰～近畿北部（日本海沿岸部）型である布勢式〔久保88〕から、北白川上層式1期に併行する崎ヶ鼻1式にかけて、屈曲口縁から内湾口縁、段状口縁へと一連の連続的な変化がみとめられる〔千葉90〕ので、こうした地域の影響が加わって1期を特徴づける口縁部形態が成立、展開すると推測できるであろう。

次に、口縁部の文様意匠についてみてみよう。口縁部は水平口縁のものは稀で、本例のようにほとんどが突起を有する形態をとり、突起部の文様とそれをつなぐ文様で構成される。仮に、前者を主文様、後者を従文様と呼んで個別にみてみよう。1期の主文様の意匠は円形刺突の回りに配する弧線文（I 86）と渦巻文の回りに配する弧線文（I 87）ないしは非対称の弧線文（I 23・I 88）に大別できる。これらのうち、前者は基本的に「広瀬土壙40段階」の文様意匠を受け継いだものと理解できるが、円形刺突のまわりに配する弧線文の数が増える点、口縁部の拡張ともなって大ぶりの意匠が増える点などに細かな差異が見出せる。このような変化のうち、円形刺突のまわりに配する弧線文の数が増えるという変化は、1期段階における胴部文様の多条化と連動した現象であろうと考えている。また、後二者の渦巻文や非対称な弧線文の配置は「広瀬土壙40段階」にはほとんどみられないものであり、I 88のように胴部文様にみられる同種の意匠を写し取ったとみるべきであろう。このように1期における口縁部主文様の発達が生じたのは前段階の意匠を継承しただけのものではなく、同時期の胴部の文様意匠との連関の中で変化していることに注目しておきたい。

口縁部主文様と胴部文様のある種の類縁関係をみとめてよいとすれば、こうした関係は口縁部従文様にもおよんでいると考えられる。それは従文様としての弧線文である。弧線文の由来を泉、玉田は「広瀬土壙40段階」に頻出する口縁部外側端部の刻み（I 9）にもとめた〔泉・玉田86〕。正しい指摘であると考えるが、前段階で沈線と外側端部の間の刻みであったものが、弧線文として主文様間を埋めるようになる契機としては、やはり胴部文様の多条化が引き起こしていると考えている。「広瀬土壙40段階」の刻みが基本的に左下

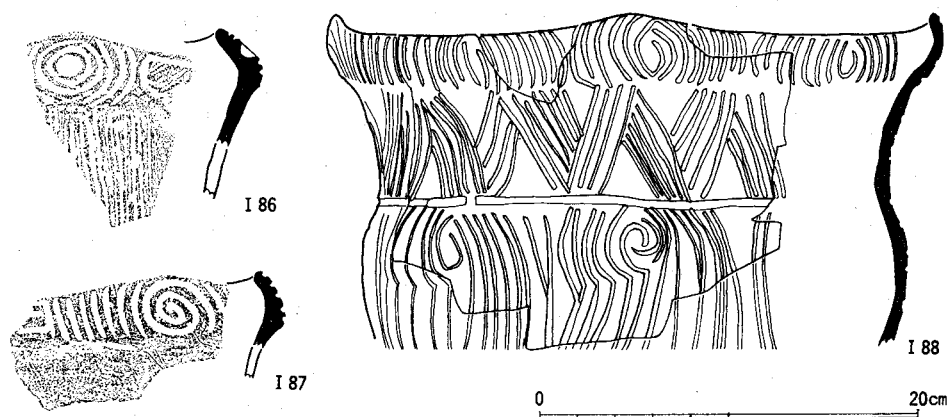


図19 北白川追分町遺跡出土土器〔中村74〕 縮尺1/4

がりか右下がりのどちらか一方で統一されているのに対して、I 88のような1期の弧線文が主文様をはさんで対称的な配置をとることや波底部での弧線文の反転が胴部の意匠に対応しているのも胴部文様意匠を写しているためだと理解できるのである。

1期の段階でのもうひとつの主要な従文様はI 22・I 23にみられる長方形区画文である。長方形区画文の由来を泉, 玉田は前段階の2条沈線にもとめ, 筆者もこれに従っているが, 端が開放された2条の沈線が区画文としてなぜ閉じるのかについては「広瀬土壙40段階」に散見される沈線末端の折りまげの手法が影響を与えたのであろうと推測している。

最後に頸胴部についてみておく。頸部を無文帯にする例は多いが, 胴部文様に縄文のみを加えるI 22・I 23は1期には類例が少ない。胴部を縄文のみですます例は2期に多くみられるものであり, I 22・I 23はその点で新しい様相を有していると考えられる。

I 14～I 21・I 24は北白川上層式2期に位置づけられる縁帯文深鉢。I 15の口縁部に対する条線文の使用は2期の特徴であり, 東大阪市縄手遺跡第10次資料〔芋本ほか87〕, 大阪府岬町淡輪遺跡1986年度出土資料〔藤永87〕などにみられる。I 16・I 17は口縁部が萎縮しており, I 17は口頸部の境が不明瞭となっている。胴部を縄文施文だけですまし, それ以外に文様を加えないものが増えることもあわせて, こうした特徴は一種の手抜き・退化とみられるものである。I 40の関東系有文深鉢が安定して器種を構成しているのに対して, 縁帯文深鉢は, 文様意匠等の展開が関東系文様の模倣を除いてほとんどみられず, 粗雑化の傾向を示していると理解できる。

I 25・I 42は北白川上層式3期の有文深鉢。三山の波状口縁になると想定できる。口縁部文様帯, 頸部文様帯(無文帯), 胴部文様帯が区別されるという点で縁帯文深鉢の文様

帯構成と軌を一にするが、三山・内湾口縁・幅広の口縁部文様帯を前段階の縁帯文深鉢の系譜でとらえることは困難である。東海西部では併行する時期に縁帯文深鉢と在地化を深めつつあった関東系深鉢との融合によって、三山波状口縁で口縁部と頸部に文様帯を有する深鉢が成立しているの、近畿の三山波状口縁有文深鉢の成立もこうした動きと連動していると推定できる。口縁部と胴部の文様意匠が、基本的に同一であり、その文様意匠が2期の関東系深鉢の頸部文様などからの展開でとらえられることから、両文様帯とも関東系深鉢の頸部文様帯の系譜をひくものと想定される。口縁部が内湾し、幅広の文様帯をもつことは、幅の広い頸部の文様帯を口縁部にあてはめたためと考えている。

以上、病院構内から出土した縄文後期前半の有文深鉢について個々に検討を加えてきた。今後、北白川追分町・北白川小倉町遺跡出土土器などとあわせて検討を進め、京都盆地東部という小地域における土器の様相を明らかにしてゆきたい。

4 比叡山西南麓における縄文時代遺跡

病院構内より出土した先史時代の遺物は縄文早期から弥生前期に及んでいる。時期的には長期にわたるが、確認された型式という点では、断続的なあり方を示し、また二次堆積のものもあって、遺物の存在をただちに縄文・弥生人の活動とむすびつけて考えることはできない。こうした中で、縄文後期前葉の土器はまとまって出土しており、その場に廃棄されたとみとめられる状況でみつかったものもあることから、病院構内東辺一帯が縄文後期の人々の活動場所のひとつとして機能していたことが明らかとなってきた。

病院構内が含まれる比叡山西南麓一帯は、複合扇状地が南北につらなった地形を示し、この扇状地上には縄文時代の遺跡が密集して形成されており、「遺跡群」として把握されている。ある遺跡を形成した縄文集団が一定の領域をもち、交易や婚姻などを通じて他の集団と密接な関係を保っていたことは様々な角度からの検討によって明らかになりつつあるが、遺跡群という概念は遺跡という単位とともに縄文集団の領域や集団の関係の様態を探る上で、重要な分析単位となることは間違いないだろう。具体的な遺跡群のあり方を検討する前に、最初に遺跡群把握の視点について簡単にみておこう。

まず、遺跡を群としてとらえるときに遺跡の密集の仕方および地形的地理的なまとまりに基づいて遺跡群としての把握を行なうが、これは当然ながら便宜的な作業単位の設定といった性格をもつものであるということを確認しておきたい。次に、注意すべきことは遺跡群としてとらえられる内容には、ふたつの異なった側面が含まれているということであ

る。第1の側面は時期の異なる遺跡の累積であり、第2の側面は同一年代を共有している遺跡の集合である。第1の側面からみた場合、遺跡群の形成は、ひとつの集団かどうかはともかく、ある集団の歴史的な変遷の結果の表現として、その地における集団の消長を示すということになる。第2の側面からみた場合、遺跡群は共時的な存在として、ある社会的な関係にもとづいた有機的な結合体の表現であるといえよう。共時的に遺跡を結びつけている、この社会的関係については、大きくみるとふたつの見方が呈示されてきている。ひとつは、複数の集団が相対的に独立して活動していたというものであり、他はひとつの集団が、拠点的な居住地以外に生業活動などに対応して一時的な利用地・野営地をもっており、遺跡のまとまりはひとつの集団の活動の反映であるとするものである。もちろん、こうした想定は遺跡における遺構や遺物の出土状況の吟味に基づき推定されているものであるし、また、ふたつの見方は相互に排除し合うという性格をもったものでもないから、現実には両者が組み合わさったより複雑な関係も十分想定される。

また、第1、第2の側面の関係については、第1の側面とは第2の側面である共時的な遺跡のまとまりを歴史的な展開過程のなかに投影したものにはほかならないのだから、両側面からの検討を統合することによって、ある一定地域に、一定期間残された遺跡群の構造や特質を明らかにすることができると理解するのである。いずれにしても、ある一定の地域的なまとまりのなかでとらえられる遺跡群は以上簡単に記したような視点に基づくことにより、その実態を追究してゆくことができるのではないかと考えている。

それでは以上のような視点に基づいて比叡山西南麓の縄文遺跡群について眺めてみよう。この縄文遺跡群についてはすでに泉拓良による検討がある〔泉84・85〕。その成果によれば、遺跡群は地形的なまとまりによって修学院・一乗寺遺跡群、北白川遺跡群、岡崎遺跡群の3つのまとまりに把握でき、これらは集団による移動や拡大の結果、形成されたものと解釈している。作業単位として、地形区分と遺跡の密集度に応じて、遺跡群をさらに3つの小さな地域単位に区分して把握する見方については継承しうる視点であろう。図20は泉の成果をもとに、それに最近の新たな知見を加えて作成したものである。病院構内東辺のAH19区は北白川遺跡群と岡崎遺跡群のほぼ中間的な位置にあることがわかるが、岡崎遺跡群が本調査区も含まれる聖護院から岡崎にかけて広がる扇状地上に位置していることから判断して、岡崎遺跡群を構成する1遺跡として規定してよいのではないかと考える。

岡崎遺跡群のうち、比較的内容の明らかになっているのは、本調査区の東200mの聖護院西町に位置する遺跡〔百瀬88〕である。ここでは幅0.5m、長さ6mをはかる溝状の土坑を

検出し、北白川上層式2期の土器・石器および植物遺体が出土している。狭い範囲での調査であり、これ以外に遺構はみつかっていないが、この地点が北白川上層式2期の集落の一角であった可能性は高い。一方、AH19区に廃棄されていた土器は北白川上層式1期のもので、時期差がみとめられることに注意したい。同一扇状地内で、地点をずらしながら遺跡が形成される現象は、北に隣接する北白川追分町遺跡でもみとめることができ、白川扇状地の南西端にあたる聖護院付近には後期前葉の遺跡が継続して営まれていたと想定することができる。そこで、これらの遺跡を聖護院遺跡と仮称し、土坑が検出された地点を1地点、AH19区を2地点として区別しておこう。このような遺跡をみとめることができるとすれば、次に問題となるのはその遺跡の性格であろう。とくに、隣接する地域である北白川遺跡群との関係が問題となろう。

北白川遺跡群では北白川追分町遺跡1地点で北白川上層式1期の墓域が検出されており〔中村74〕、北白川小倉町遺跡〔梅原35〕や北白川別当町遺跡〔横山・佐原60〕では北白川上層式2期の遺物がまとまってみつかっていて、後期前葉に継続的な遺跡形成がこの地域内でおこなわれていたことを推定させる。とすれば、聖護院遺跡が含まれる岡崎遺跡群と北白川遺跡群という隣接する2つの小地域に遺跡が同時に営まれていた可能性が高く、その両者の間の関係が焦点となるのである。調査地点が限られており、検出遺構も十分でない現状で両者の関係を明らかにするには資料が不足していることは否めないが、大別して次のような2つの可能性を想定することはできよう。

- (1) 岡崎遺跡群を形成した集団は、北白川遺跡群を形成した集団とは別集団に属し、この地一帯で恒常的に集落形成をおこなっていた。
- (2) 岡崎遺跡群と北白川遺跡群は同一集団によって残されたもので、一方は拠点的な集落であり、他方は一時的な利用地として、生業形態や季節に応じて反復利用された。

(1)、(2)どちらの蓋然性がより高いかを決めることは現状では困難といわざるをえないが、両遺跡群が形成された後期前葉期は比叡山西南麓の遺跡群ばかりでなく近畿全域に目を広げてみても、遺跡数あるいは遺構・遺物の質・量ともにみるべきもののもっとも多い時期のひとつであり、相対的な安定期をこの時期にみることができるともかもしれない。こうした相対的な安定性を背景にした集団の膨張を集落規模の拡大という方向にではなく、小集団の分岐という形で解決したと想定することもできる。その場合には集団の分岐という形で(1)のあり方が推定されることになる。ただし、資料的制約も大きいのでここでは結論を急ぐことはせず、今後に対する問題提起としておきたいと思う。

比叡山西南麓における縄文時代遺跡

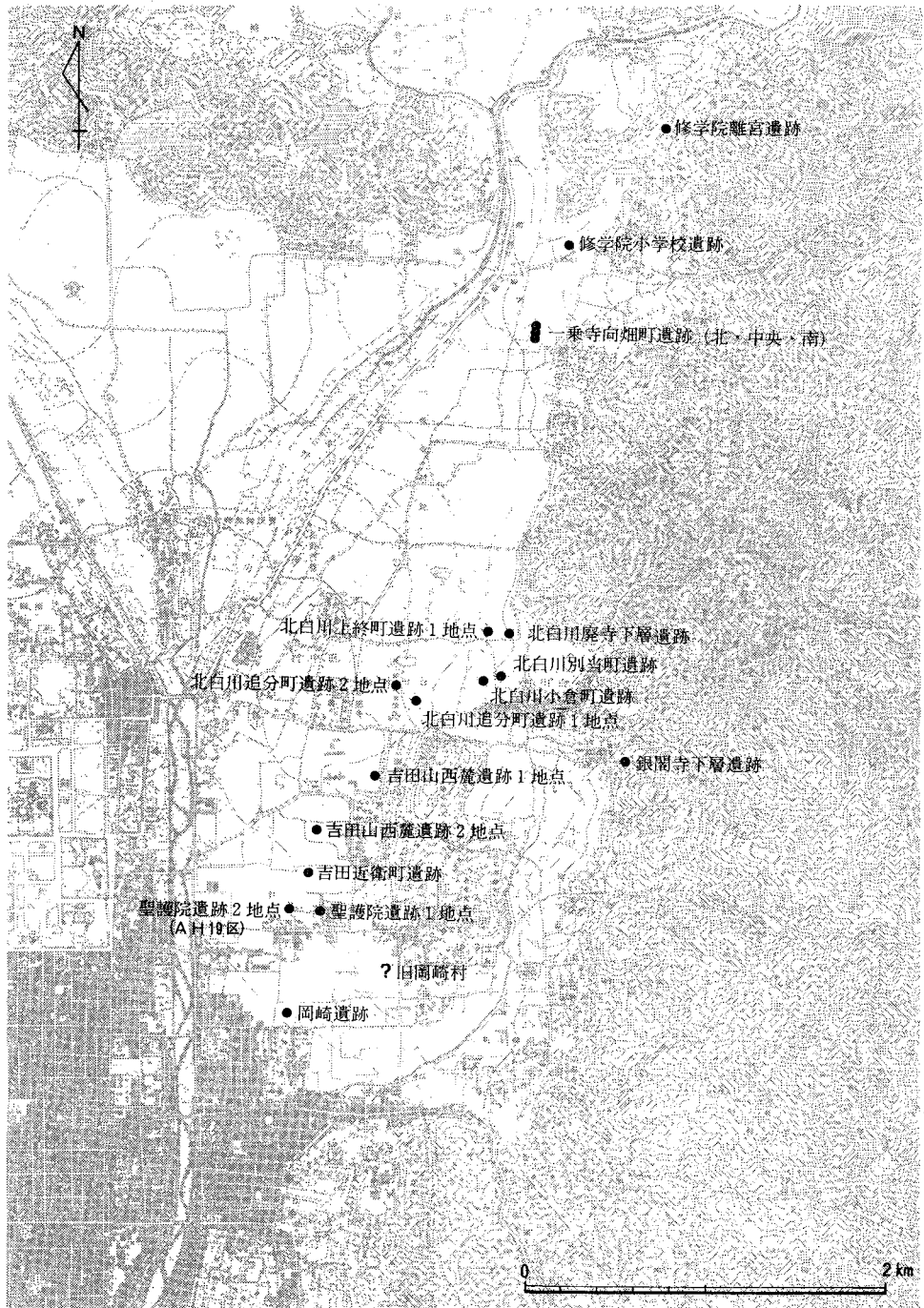


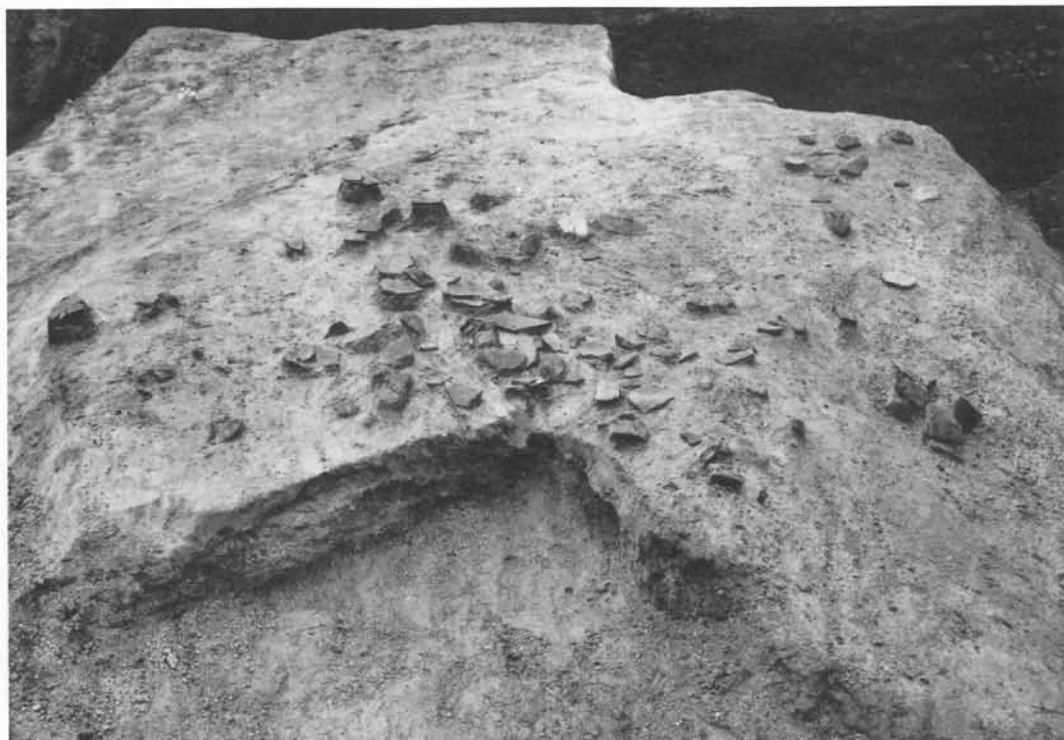
図20 比叡山西南麓の縄文時代遺跡 ([泉85]に加筆) 縮尺1/40000

病院構内の先史時代遺跡

いずれにしても、病院構内でみつかった聖護院遺跡2地点は、聖護院遺跡1地点とともに岡崎遺跡群を構成するもので、内容がよくわかっていない岡崎遺跡群のあり方を明らかにするひとつの材料となるだけでなく、比叡山西南麓で活動した縄文集団の実態を探るうえでも重要な資料となろう。今後、周辺地点の調査がすすめば、上述した遺跡の性格なども一層明確になっていくことが期待される。

〔参考文献〕

- 網谷克彦 1982年 「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』3
- 泉 拓良 1981年 「縄文後期の土器—近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4
- 1984年 「縄文時代のムラ—近畿地方—」『縄文から弥生へ』
- 1985年 「縄文集落の地域的特質—近畿地方の事例研究」『講座考古地理学』4
- 泉 拓良・玉田芳英 1986年 「文様系統論」『季刊 考古学』第17号
- 泉 拓良・松井 章 1989年 『福田貝塚資料』（『奈良国立文化財研究所史料』第32冊）
- 五十川伸矢・浜崎一志 1989年 「京都大学病院構内A J 18・A J 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 今村啓爾 1977年 「称名寺式土器の研究(上)」『考古学雑誌』第63巻第1号
- 芋本隆裕・菅原章太・勝田邦夫 1987年 『縄手遺跡・若江遺跡の調査—昭和61年度—』（『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要』28）
- 植田文雄 1990年 『今安楽寺遺跡』（『能登川町埋蔵文化調査報告書』第17集）
- 梅川光隆 1971年 「京都周辺の縄文時代遺跡 No. 3.4」『第24とれんち』
- 梅原末治 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第16冊
- 京大遺跡調査会（京都大学構内遺跡調査会）
- 1988年 『京都大学医学部附属病院構内の遺跡—A H 19区発掘調査現地説明会資料—』
- 久保穰二郎 1987年 「鳥取県下における後期前葉から中葉にかけての縄文土器の変遷について」『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』
- 佐原 眞 1961年 「京都市一乗寺縄文文化遺跡の調査」『古代文化』第7巻第2号
- 玉田芳英 1989年 「中津・福田KⅡ式土器様式」『縄文土器大観』4
- 千葉 豊 1989年 「縁帯文系土器群の成立と展開」『史林』第72巻第6号
- 1990年 「近畿北部・山陰東部の成立期縁帯文土器」『小森岡遺跡』
- 中村徹也 1974年 『京都大学理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 浜崎一志・宮本一夫 1987年 「京都大学病院構内A F 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 藤永正明 1987年 『淡輪遺跡発掘調査概要報告書・Ⅶ』
- 三好博喜・肥後弘幸ほか 1989年 『志高遺跡発掘調査報告』（『京都府遺跡調査報告書』第12冊）
- 百瀬正恒 1988年 「白河街区1」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 横山浩一 1979年 「刷毛目技法の源流に関する予備的検討」『九州文化史研究所紀要』第24号
- 横山浩一・佐原 眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部 日本先史時代



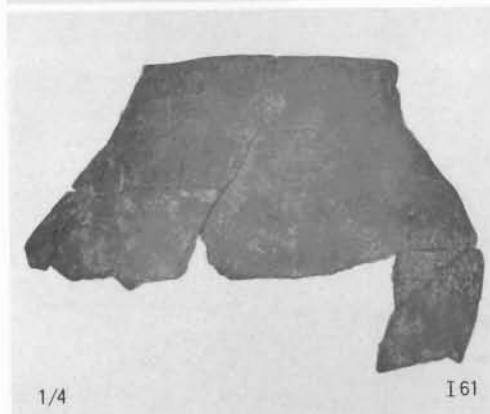
病院構内A H19区縄文土器出土状況（北から）



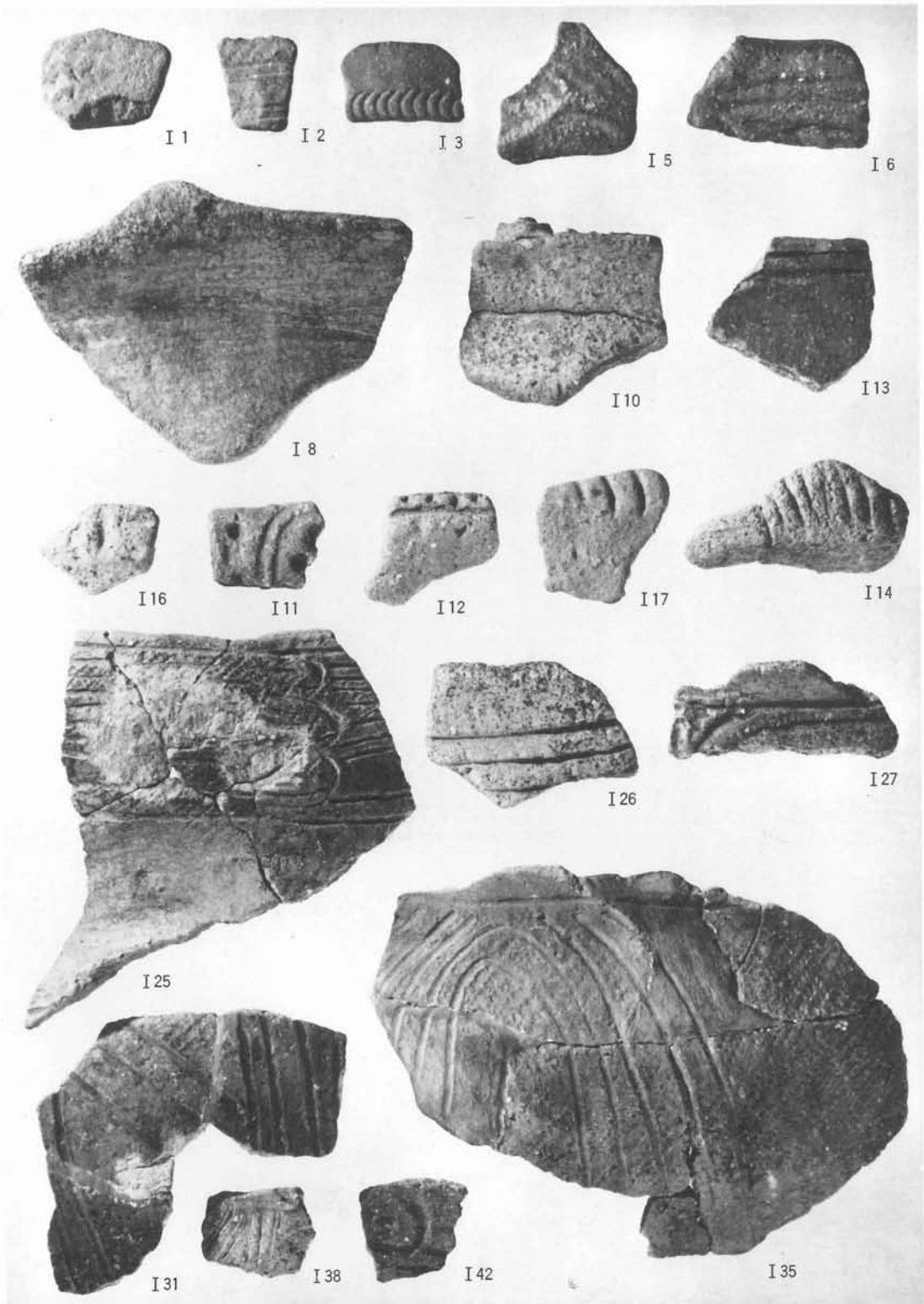
同（東から）



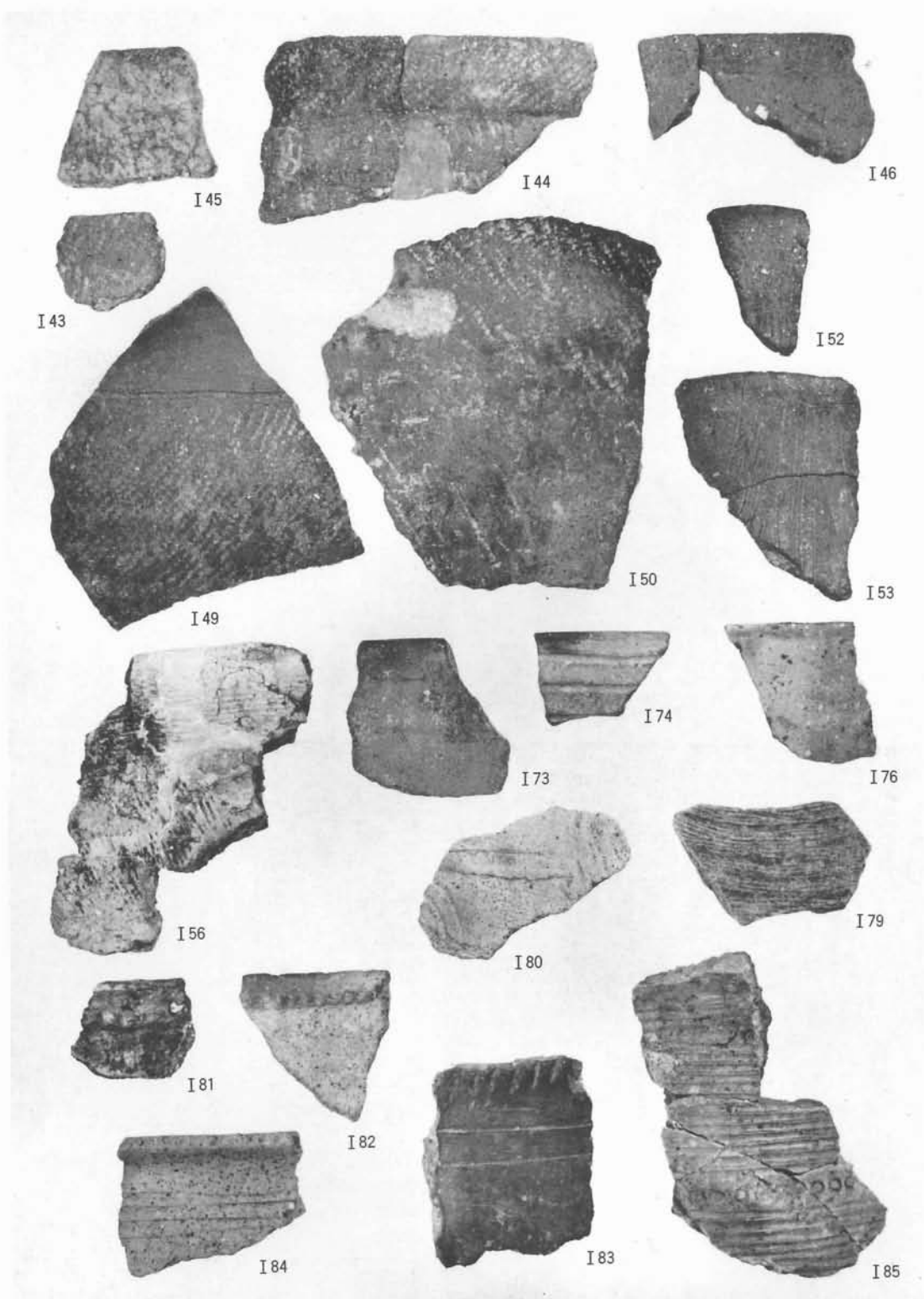
同（西から）



縄文後期の土器 (I22・I23・I61・I63・I64)



縄文早期の土器 (I 1), 縄文前期の土器 (I 2・I 3), 縄文中期の土器 (I 5),
縄文後期の土器 (I 6・I 8・I 10～I 14・I 16・I 17・I 25～I 27・I 31・I 35・I 38・I 42)



縄文後期の土器 (I 43・I 46・I 49・I 50・I 52・I 53・I 56・I 73・I 74・I 76・I 79・I 80),
縄文晩期の土器 (I 81・I 82), 弥生前期の土器 (I 83・I 85)